



日本バプテスト聖書神学校 JAPAN BAPTIST BIBLE COLLEGE

◇ 校長の机から ◇



校長代行 斉藤 秀文

昨年9月から校長代行という働きをこの群れから一時的に預かりました。愚痴ではありませんが、昨年の秋には豪雨に見舞われ、今年、後期授業開始と同時に16日間、新型コロナウイルス感染症の問題を受けて、授業を休講にしなければなりません。その為に諸教会への報告は、いつも祈りの要請でした。楽しい報告、望みの持てる報告ではありません。

そこで私の心は呻くのです。「何故、次から次と困難なことばかりが今年度に限って起こるのか、何故、よりによって今年度なのか」と。しかし同時に私の心には、大きな平安と喜びがあるのです。それは、「今年度ほど、諸教会の先生方を始め、兄弟姉妹方の祈りと具体的な支援によって支えられていることを覚えることができた年はないのではないか」と。大きな慰めが心に広がるのを覚えたからです。

そこで私の心は呻くのです。「何故、次から次と困難なことばかりが今年度に限って起こるのか、何故、よりによって今年度なのか」と。しかし同時に私の心には、大きな平安と喜びがあるのです。それは、「今年度ほど、諸教会の先生方を始め、兄弟姉妹方の祈りと具体的な支援によって支えられていることを覚えることができた年はないのではないか」と。大きな慰めが心に広がるのを覚えたからです。

私の心の内は、ルツ記のナオミの言葉を思い出しておりました。ナオミは、夫と息子を失って、失意のうちに故郷に帰り「私をナオミ(快い)と呼ばないで、マラ(苦しむ)と呼んでください。全能者が私を大きな苦しみにあわせたのですから。」(ルツ1章20節)と言うのです。「能力(ちから)が無いのに引き受けるからだ

よ。傲慢だったので砕かれたのだ」との内なる声がします。何の肩書きもない、神学的学識も浅い私にとっては、「どうしてそんな大役を受けたのだ」との忸怩たる思いにかられるのです。しかし、その私は同時に、何とも言えない神の慰めを頂いている事を覚えたのです。今年、三澤先生の冬期講座(「聖書信仰に生きる」)を思い返し、御言葉の約束に生きることを思い起こし、大きな慰めとなったのでした。

確かに「何故?」、「どうして?」という問の答えは、今も得られていません。しかし、主権者なる神が御子を十字架の苦しみ追いやってまで(それは父なる神の苦しみでもあったことでしょう)、罪人を憐れんでくださったのです。何故そうされたのかは、私たち人間には解らない、神の奥義です。

また、御子イエスの十字架上の「エリ、エリ、レマ、サバクタニ(わが神、わが神、どうして私をお捨てになったのですか)」「(マタイ27章46節)の叫びは、深い神の御摂理を受け止められたうえでの叫びです。全てをご存じの主なるイエスの叫びなのです。神が良しとされたとき、ナオミがダビデの父となるエッサイの父親(オベデ=礼拝者の意味)を抱き、「ナオミ(快い)」と呼ばれる者となったように、私もオベデ(礼拝者)を抱く者とされるでしょう。すでに私は礼拝者とされています。私にとって、このように聖霊なる神による神の約束の確かさを教えられていることが大きな慰めの日々なのです。

-冬期講座要旨-

「聖書信仰に生きる」

三澤隆男先生(柏伝道所)

私たちの聖書信仰



私たちは、聖書は靈感された誤りのない神のことばであり、人間のすべての行為と思想また信条をためす最高の規範であると告白し、聖書を唯一の権威として全面的に信頼しています。その根拠は、聖書自身が「聖書はあなたに知恵を与えて、キリスト・イエスに対する信仰による救いを受けさせることができます。聖書はすべて神の靈感によるもので、教えと戒めと矯正と義の訓練のために有益です。神の人がすべての良い働きにふさわしく、十分に整えられた者となるためです」

(Ⅱテモテ 3:16~17) と主張しているからです。「すべての支配と権威のかしら」(コロサイ 2:10 参照同 1:16、マタイ 28:18) である救い主キリストは、「聖書が、わたしについて証言している」(ヨハネ 5:39) と言われ、また「モーセやすべての預言者たちから始めて、ご自分について聖書全体に書いてあることを彼らに説き明かされ」(ルカ 23:27) しました。神の御子キリストが、聖書を信頼すべき神のことばとしておられます。唯一至高の私たちの主キリストが、聖書を権威あるものとされているなら、それより以上の弁証は不要です。「聖書が神の靈感よる」との原語は、「神の息によって吹き出されて」の意で、死者をも生かす神の創造的息吹によって記された書物であることを宣言しています。また「預言は、決して人間の意志によってもたらされたものではなく、聖霊に動かされた人たちが神から受けて語ったもの」(Ⅱペテロ 1:20) で「聖霊に動かされた」と

は、聖霊が記者たちに彼らの意志を超えて彼らを担ぎ運ぶような影響力を及ぼし、記させたということです。しかも、聖書記者自身の言語活動の特徴のすべてを失うことなく、神が直接関与して記させたので、神の言葉です。聖書信仰とは、このような主イエスの教えと靈感の理解に基づいて、聖書に全面的な信頼し、それに従って生きることを意味します。

教会は、聖書を無謬な(誤りのない)書と告白してきました。しかし、カトリック教会は教皇や教会会議と教会教父たちの伝承にも、聖書と同等の権威があるとしていました。それに対し、教会の上に権威を有するのは聖書のみと主張したのは、16世紀の宗教改革者たちで、ルターは「神のことばが、教会の教えと信仰告白を確立する。それは天使であっても覆すことは出来ない」(1536年シュマルカルト信条)と告白しています。バプテストも、第二ロンドン信仰告白第一章で「聖書を信すべきものとしているその権威はいかなる者や教会の証言にも依拠せず、全くその著者である(真理そのものである)神に依存している。したがってそれが神の言葉であるゆえに聖書は受け入れられるべきである」と主張しています。聖書こそキリストを証する誤りのない権威ある神のことばだと信じ、聖書に導かれ生かされる聖書信仰は、時代を越えて今に至っています。



自由主義神学と聖書信仰の戦い

18世紀のヨーロッパは、人間の理性によって物事を合理的に認識しようという啓蒙思潮に揺さぶられました。教会の中にも、聖書に対して、これまでの教会の教えに縛られず、個々人の合理的判断に従って再解釈しようという「自由主義神学」(Liberal theology)、あるいは近代主義(Modernism)と呼ばれるキリスト教が生まれました。進化論等の科学的な見方を許容し、他の古典研究と同じように、聖書にも歴史的批判を加え、その書が執筆された歴史的背景や編集過程などの解明を通して解釈しようとしていました。その結果、彼らに神話的と思える記事を歴史的事実ではなく宗教的に有益な寓話、物語等と見做し、聖書も単に人間の宗教的遺産に過ぎないとしたのです。J. メイチェンは著書

「キリスト教とは何か」で、「キリスト教は聖書の上に建てられている。それは、その思惟と生活とを聖書の上にすえる。しかし自由主義神学は、罪ある人間の移りゆく情緒の上に建てられるのである」(p104)と断じ、さらに「リベラリズムという宗教は『自然主義(ナチュラリズム)』に根差しているのである。自然主義というのは、キリスト教の起源に関して神の創造的な力(自然の通常の過程から区別される神の創造力)のいかなる介入をも否定するものことである」(同書p10)とその本質を指摘しています。岡田稔も、「キリスト教は、本質的に超自然的な神とその啓示に基づく宗教である。創造と受肉と復活という超自然的事実を基調とする歴史観によって立つものである。それゆえ、一切を自然法と理性の範疇で律しようとする啓蒙思想とは、いかなる見地より見ても異質的なものであると私には思われる」(「キリスト教」p73～)と批判しています。



19世紀のキリスト教会は、この自由主義神学の嵐に揺さぶられ、聖書信仰に立つ正統派は守勢に立たされました。危機感を募らせたキリスト教正統派は、1895年にナイヤガラで聖書会議で、「それなしにはもはやキリスト教ではなくなる最小限度のキリスト教信仰の根本的なもの(キリスト教の根本信条)」を守ろうと決議しました。後にB.B. ウォフィールドが主張した、聖書の無誤性、処女降誕、十字架による贖い、キリストの肉体を伴った復活、奇跡の事実性が、「五つのファンダメンタル」として知られています。この立場に賛同して自由主義キリスト教と戦った人々が、根本主義者(ファンダメンタリスト)と呼ばれました。彼らは、ヒューマニズムに埋没しかけている自由主義キリスト教に対抗し、正統主義キリスト教を守ろうとしました。J. I. パッカーは、根本主義と自由主義とを対比させ、「歴史的な福音主義と近代的な主観主義、全く神から授かったキリスト教と一部は人間手製のキリスト教」と、その違いを端的に表現し、根本主義者の主張を評価しています(「福音的キリスト教と聖書」p239)。

聖書信仰への挑戦（1）

無誤性の否定

1940年代の米国の根本主義の中から、分離主義を排しアカデミックな神学の形成と社会との関与等を目指す「新福音主義（New Evangelicalism）」が登場しました。間もなく新福音派内から、聖書は、信仰と倫理の点で無謬であるが、歴史や科学の分野には誤りがある、と主張する者が出てきました。歴史的批評の一部を受け入れた主張です。それに対して、新福音派のひとりハロルド・リンゼルが、1976年「聖書のための戦い」を出版し、「無誤性を堅持しない多くの福音主義者は・・・無誤性を放棄した時点で福音派のバッジを返上すべきであると私は疑いもなく信じている」と挑戦し、自分の立場を「歴史や科学の分野においても聖書は誤りがないと主張する聖書の無誤性の固守である」と主張しました。聖書には、歴史や科学の面での記述にも誤りがないとする「無誤性」という用語が登場しました。1978年、主要な福音派の神学者らが署名した「聖書の無誤性に関するシカゴ声明」が出され、無誤性の主張はさらに明確にされ、福音派内の聖書信仰からの逸脱に強い警告を与えました。

第二次世界大戦後の日本では、米国から根本主義信仰に立つ宣教師を大勢迎え、聖書の権威と十字架の贖い、福音伝道の緊急性等を重視する福音派の教会が、日本全土に広がりました。それらの聖書信仰の諸教派が、協力しようと1968年に「日本福音同盟」を結成しています。シカゴ声明は、聖書の無謬性を告白する日本の福音派内に、声明に賛同の無誤性派と、声明に賛同せず聖書の多様な研究に寛容な者たちとの相違を明らかにし、論争が現在も続いています。



聖書信仰への挑戦（2）

解釈学の挑戦

19世紀末から盛んになった言語学の研究（ナラティブ批評、記号論、構造主義、ポスト構造主義等）の中で、著者よりも読者に焦点が当てられ、「言語で伝達された使信には、送り手の意図よりも受け手の解釈が重要だ」という主張が出てきました。そのような解釈を、伊藤明生氏は「テキストの意味とはテキストを書いた著者の意図ではなく、読者がテキストから作り出すものであるとさえ主張するもの」と批判しています（福音主義神学誌 30号 p5～22）。聖書を物語として解釈する方法もその一つと考えられます。所与のテキスト（聖書）を統一性のある有機的構造物（物語）として受け止め、物語様式に固有の表現方法で分析し解釈しようというものです。物語理解は客観主義がとらえきれない、本来聖書の有しているダイナミズムを明らかにする方法であるとも主張されますが、物語の持つ意味の相対性多様性への危惧を拭えません。

「パウロ研究の新しい視点」といわれる主張が、現在、注目を集めています。1977年、E. P. サンダースが、BC2世紀～AD2世紀のユダ

ヤ教研究に基づいて記した書で、当時のユダヤ教は恵みの宗教であり、パウロ当時のユダヤ教が律法主義であったとした従来の見解を否定、従ってパウロの神学についての再考が必要だと主張しました。福音主義の新約学者として知られるN. T. ライトは、多数の著書があり邦訳書も出しています（「クリスチャンであるとは」

「使徒パウロは何を語ったのか」他多数）。彼は、キリストが主権をもって君臨する神の国の到来を語り、聖書の無謬性とキリストの復活を信じる福音派であるが、物語神学の立場で聖書を読んでいます。さらに、彼はサンダースの見解を採用し、従来のパウロ理解を退けます。信仰による義を、罪人が信仰によって神に義と認められるとの理解ではなく、誰がその共同体に属するかを説明するものであるとし、神の義は罪人を義とする神の恵みの働きではなく、契約を果たす神の信実を意味するものだとは主張します。このライトの主張に学ぶべき点が多くありますが、彼にどう答えるか、私たちは今、問われています。

最後に

聖書は神の言葉ですが、歴史の中に生きた記者がそれを記した人の言葉でもあります。聖書の理解を深めるためには、聖書の記者や読者の置かれた状況を知ろうとする努力は大切です。しかし、神のなさることと言われることを、人がすべて理解することは不可能です。不明のところを不明として受け止め、逸脱することを戒める謙虚さが必要です。また、聖書信仰は、聖書の権威を認めるだけでなく、聖書の言葉に生かされ、全面的に信じて従うことをも意味します。生ける神の言葉の創造的力に参与し、その恵みと力とを味わい、証しするという、光栄ある特権を十分に行使したいものです。（終り）

三澤先生の冬期講座の CD/DVD を販売しています。詳しくは 11 ページをご覧ください。



..冬期講座に参加して..

西原 智彦（八王子 BBC 牧師）

「聖書信仰に生きる」というテーマを伺った当初、私は参加に消極的でした。聖書信仰にたつ具体的な営みを学びたいと思っていました。講壇から「聖書は神の言葉だ」と宣言するのは簡単ですが、実生活において神の言葉として聖書に従うことは難しい。このギャップの前に私は、生きて力がある神の言葉を過小評価していたのかもしれない。しかし同時に、自分の価値判断のみに従う学びの危うさを感じていました。恩師の三澤先生から母校において学ぶ機会を失いたくないという思いもあり、参加を決めました。

先生はご準備された膨大な資料から五部構成で教えて下さいました。第一部では日本のキリスト教界で生まれた「聖書信仰」という言葉の定義と背景を、第二部では初代教会から新福音主義に至るまでの聖書理解の歴史を、第三部では福音派と根本主義の共通点と違いから JBBF への投げかけを、第四部では命題的な聖書の読み方への反動の数々を、第五部では聖書を神の言葉として信じ、従い、伝える重要性を教わりました。

私の心に迫ったのは、宗教改革と対自由主義の中で聖書を神理解の知識の書とした命題的聖書信仰と、敬虔主義や大覚醒の中で聖書を聖霊が働いて奇跡を起こす神の力とした霊的聖書信仰の両方が必要、と先生が強調されたことです。先生はこう記されています、「聖書に対して、真理とともに躍動するいのちをも求めて取り組むことが求められている・・・聖書に真摯に取り組む若い仲間が起こされることを望む・・・この群れに召された同労者と、共に研鑽に励む者でありたい」。聖書の意味を丁寧に学び、その内容の重大さに心打たれる聖書信仰を、私も、私の教

会も、そして JBBF 全体でさらに育んでいきたいと心新たにしました。ご準備下さった三澤先生、神学校の先生方、学生の皆様に感謝致します。



渡邊 清嗣（名古屋 BBC 教会員）

＜案ずるよりも参加するが易し＞

会社勤めもあり、私にとって冬季講座は遠い存在でしたが、突然に目の前が開かれるようにして参加する恵みに与かりました。締め切りも過ぎた日、ふと、何気なく妻に「冬季講座に参加してみませんか？」とメールしたところ「実は行きたいと思っていました。」という思いがけない返信がきました。受浸して一年の彼女は『聖書信仰に生きる』という題に魅かれ「聖書信仰とそうではない立場のことも知りたい。」とっていて、私からの誘いに驚いた様子でした。緊張しつつ参加しましたが“案ずるよりも参加するが易し”でした。

開会礼拝で斎藤師（校長代理）は、現代は、個人の権利や多様な価値観を主張するあまり、信頼すべき権威を失い、思索する土台を失って流動化してしまっている。教会もこの風潮の影響を受けている。今こそ『聖書信仰に生きる』ことの重要性を強く示され、その第一弾として、三澤先生にご奉仕をお願いしたと、今回の企画と主旨を述べられました。

三澤先生は60頁余のテキストを準備して下さり、6回にわたり、篤く、丁寧に語りかけてくださいました。私たちバプテストが立つ聖書信仰に挑戦する者たちとの戦い(今も続いている)の歴史、その信仰の内容について、また、私たち信仰者の歩むべき道について、初心者にも分かりやすく教えて頂きました。三澤先生の冒頭のおことば「あなた方は、聖書信仰を標榜していますが何のためですか？人に見せるためですか？私たちは、聖書信仰そのものを生きる者、証する者とならなければなりません。」が心に刻まれました。

神学生の方々の清々しく凛々しいご奉仕と、先生方兄弟姉妹方との素晴らしいお交わりの恵みをも振り返り、感謝しつつ「また参加したいね。」と帰りの電車で語りあいました。



齋藤 光彦 (神学校4年生)

主の御名を賛美致します。

今回の冬期講座では、「聖書信仰に生きる」というテーマで、船橋聖書バプテスト教会柏伝道所牧師、三澤隆男先生が講義して下さいました。心より感謝致します。

福音派の中にも、「聖書信仰」に対して疑問視する新しい解釈が広がりつつあること。聖書の靈感の意味について、また、神の言葉である聖書を信じて生きる意味に関して教えてください

ました。

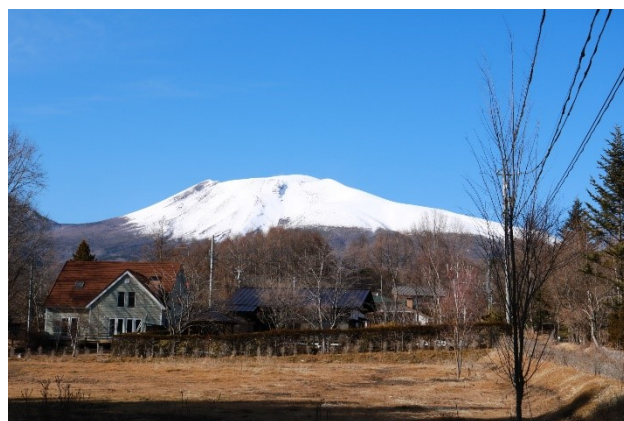
第一部の「聖書信仰について」では、聖書信仰の基礎は、聖書が神の言葉であり、聖書が不可謬(無誤無謬)であること、聖書の靈感、権威は聖書自体が教えていることを教えてくださいました。

第二部の「聖書信仰の歴史」では、初代教会時代から福音主義の再興、そして新福音主義にわたり教えてくださいました。過去には、根本主義と自由主義との戦い、そして現代では、「新福音主義の第一世代」と「新福音主義の第二世代(高等批評を受け入れる)」が分裂を生み出し、福音主義者をまとめ上げる可能性を失ったこと、この二つの流れは日本の福音派の中に混乱をもたらしている、と示されました。

第三部の「福音主義と根本主義と私たちについて」では、根本主義と福音主義の違いが語られ、「JBBFの位置」として、「現在の混迷化して行く社会」の中で「聖書的な正しい理解と判断力」がより必要であることを示されました。

第四部の「聖書信仰」が今直面している問題についてでは、聖書の無謬性と無誤性の問題、また、聖書解釈の問題として物語神学が取りあげられました。

「聖書信仰に生きる」ということを過去から現在に至る聖書神学を幅広く、解釈上の問題点を含めて教えていただいたことを感謝致します。



-通信教育課程

冬期スクーリング開講-

通信課程担当・小川 淳司

2019年度神学校通信教育課程の冬期スクーリング講座として、「ギリシャ語入門」（選択、4単位）の講義を行いました。これまでスクーリングは、冬期講座等に参加・受講することで、単位に変えていました。しかし、これらの講座のテーマが、通信課程での開講科目と内容的に合わないことも少なくなく、なかなか通信課程の単位換算が進まないという課題がありました。今期から、これを解消するため、通信課程の科目での独立したスクーリングを開講することになりました。

今回は、3名の通信生の受講でした。全員ギリシャ語に触れるのは初めての前提で、二日間にわたって、導入、ギリシャ語文法の基礎、聖書ギリシャ語本文の読解、そしてさらなる学びのためのガイドという大枠で講義を進めました。特に導入では、「聖書ギリシャ語とは何か」、また、この学びの「意義」、「動機」、「目標」について、特に時間を割いて説明しました。「キリスト者が、決して易しいとは言えない言語をなぜ敢えて学ぼうとするのか」という問いかけから始まって、アルファベットの読み書き、単語の読み方から、ギリシャ語特有の文法の特徴を踏まえつつ、その文法の基礎の入り口を学びました。応用篇としてマタイの福音書のギリシャ語と翻訳文を見比べつつ、どのように訳されているか、またなぜそのように訳されているかについて見ていきました。

受講された学生の皆さんは、立場も、背景も、年齢もまちまちでしたが、それぞれ神のおことばを原語で読んでみたいという熱意と興味をもって熱心に学ばれました。私自身も、受講生の皆さんとともに、真剣かつ楽しい学びができたことを主に感謝しています。講座では、新約聖書

ギリシャ語のさわりの部分しか触れられませんが、今後それぞれの関心に従って、さらに学びを進めていただけたらと願っています。



・・スクーリングに参加して・・

橋場 斐子（調布 BBC 教会員、通信生）

小川淳司先生のギリシャ語教育への熱意溢れる講義をいただきまして楽しく学ばせていただきまして感謝申し上げます。

新約聖書がギリシャ語で書かれたもので、神の靈感されたおことばの意味をより正しく理解し、神の御心をより深く受けるため、遅れ馳せながらギリシャ語で新約聖書を読みたいと思います。

アルファベットベットの24文字の発音練習から、小文字の書き方まで丁寧にご指導いただきとても楽しいときでした。

動詞は語尾につく語によって一人称、二人称、三人称が区別されるところは、主語なしで読み取れる点で簡潔で素晴らしいと感じました。時制についても、文脈で訳し分ける点も簡略で分かりやすいと思いました。

名詞についても男性名詞、女性名詞、中性名詞が語尾の表記で見分けるのも面白いです。

「主の祈り」マタイ6章9-13節を実際にギリシャ語で読めるように教えていただき、達成感を味わうことができました。暗唱することはできませんが、ご指導いただきましたから辞書を引きながら、一節ずつでも日々の祈りに加えていきたいと思っています。

神学校校舎のための 祈りとご支援に感謝します

総務担当・石川 実

神学校の最寄りのインターチェンジは碓氷軽井沢です。その間に県道の山道があります。昨年10月の超大型台風19号の爪後が、今年2月末の時点で未だ残っていました。峠道の5カ所くらいで、土砂が崩れていて、ブルーシートが掛けられて少しずつ復旧工事をしていました。神学校校舎も一部床上浸水と5本の白樺の倒木がありましたが、今は整えられました。浸水によりじゅうたんの張替は工務店により、倒木の処理はJBBFの教会の牧師先生ご夫妻が来て下さり、チェーンソーで処理をしてくださいました。予期しない44万円の出費（主にじゅうたん）がありましたが、10の教会と2人の兄弟から、出費を上回る62万円の台風被害指定献金が献げられました。



前回の神学校だよりでは、主に校舎の大きな設備のことを紹介させていただきました。その他に、家族寮ベタニア館の外壁塗装と学生寮の屋根のペンキ塗りも10年経過しています。今年1月には、浄化槽のメンテナンスを年間約4万円でしていただく契約をしました。その他、全体的な計画は未だですが、知り合いの工務店で1級建築士の方がいますので、アドバイスをいただきながら、神学校管理委員会で続けて検討していきます。

その後、半年もたたない間に、神学校にいると様々なことに遭遇します。小さなことですが、ご紹介させていただきます。キツツキが外壁に穴を開け、塞ぐ作業を先生と学生がしました。（これは例年のことです）浴室とトイレの凍結防止用ヒーターが寿命で壊れていて、2台を中古で交換しました。台所の電子レンジも古く、交換しました。動かない芝刈り機（庭の草刈り用です）を新調しました。また、除雪機が故障して輸入先に問い合わせましたが、部品すら手に入らないとのことでした。国産の除雪機は30万円近くもしますので、工作が得意な方に部品を1万円で作っていただき修理ができました。これらはほんの一例です。



建物は、築42年目に入りました。建物内の設備も古くなっています。たとえば、消防法で定められている非常用放送設備も、いつ壊れるかわからない状況です。また、ビジネスホン電話の8台もかなり古いものです。新しくしたいものが沢山ありますが、予算が限られていますので、壊れるまで使う、壊れたらできる限り直すというのが現状です。

このような状況ではありますが、この神学校舎が用いられております。今後、更にこの群れ全体に（神学・宣教・人材養成等の面）お仕えできる神学校でありたいと願っております。主と主にある御教会の更なる祝福のために祈るばかりです。

教師紹介

上田 晃

(名古屋 BBC 国内宣教師)



主の聖名を賛美いたします。千葉市天台に新校舎が完成した年に、牧会書簡を担当するよう依頼されました。その頃、関西単立バプテスト神学校で実践神学部門の担当教師として教鞭をとらせていただいております、二つの神学校で奉職することになり二年後、本神学校で実践神学部門の担当教師として御用をすることになりました。伝道学、教会管理学、牧会学、個人伝道学、比較宗教学と徐々に教科が増えていきました。

毎週名古屋からの通勤は大変でしたが、主に守られ、教会の祈り、家族の理解に支えられて今日を迎えました。途中数か月のブランクはありましたが、ともに勉強をさせていただきながら、今日を迎えました。現在の教師方は、ほとんどの方が教え子になりますが、はるかに、私を超えて教会においても神学校においても、よく勉強をされて、素晴らしい働きをしておられ、教えられることがたくさんあります。「先なる者が後になり、あとなる者が先になる。」のお言葉の通りです。次代を担う牧師、伝道者、教師が育てられ御国の働き人を主が呼び出されることを祈り、願っております。

取るに足らないものを主がきょうまで使って下さったこと感謝しております。主と母教会、諸教会に対し、心からお礼を申し上げます。

次のことばは真実です。「私たちが、キリストとともに死んだのなら、キリストとともに生きるようになる。耐え忍んでいるならキリストとともに王となる。」(テモテへの手紙第二 2章 11～12節)

上田晃先生の特別記念授業が神学校で開かれます。詳しくは 12 ページをご覧ください。

清水 浩治

(入間 BBC 牧師)



入間聖書バプテスト教会牧師の清水浩治です。千葉の神学校では、卒業時に 1 クラス 12 名もおり、皆さんと良いお交わりをさせていただきました。

私は自分を導いてくれたジェイムス宣教師の願いもあって、卒業後にアメリカ、ウィスコンシン州にあるマラナサバプテストバイブルカレッジのセミナーで、M.Div(牧師、宣教師向けのコースで、学びの傾向は幅広く、浅く)の学びをしてきました。

日本に戻ってきて数年後、杉浦先生が校長先生の時に「勉強をしてきたならば、それを生かしていただければ」と声をかけていただき、助手としての一年を終えた後に、教師として教え始めました。

早いもので、その時から四半世紀の時が流れました。当初は神学部門所属でしたが、四年目から聖書神学の部門に移り、おもに聖書解釈学(聖書を解き明かす上でのルールの学び)の科目を担当してきました。アメリカのスプリングフィールドの学校との提携の時に、ディスペンションの科目がカリキュラムに含まれる必要からその科目も担当するようになりました。

聖書科目の学びは言うまでもないのですが、良書が英語の本に多くあるため、学生には英語を学ぶように、とうるさい教師です。



上山 要
(幕張B B C牧師)



私が神学校の奉仕をするようになったきっかけは、神学校を卒業して間もなくの頃、当時校長であられた三澤先生より、先生の授業（牧会事例研究）を手伝ってほしいと

言われたのが始まりでした。

私は神学校に入学する前に社会福祉（ケースワーク）とカウンセリングを学んだのですが、このことに興味を持ったのは亡き父の言葉に因りました。「これからの牧師は何かもう一つ、専門となる学問を学んだ方が良い」。

私は小さい時から漠然とでしたが、大きくなったら牧師になりたいと思っていました。ですから大学入学の道が一旦閉ざされた時、神学校を含めた別の方向性を牧師である父に相談しました。その時に父は先述の言葉と共に「困難な道を選ぶように」とアドヴァイスをくれました。また「これからはカウンセリングの時代だ」と言って、それに関するたくさん本を父自身も読み、私にも勧めてくれました。それが私が大学の専攻を決めた動機でした。今から40年近くも前のことですが、その父の言葉は確かでした。

父の遺言の一つに「学んだことをフェローシップに還元するように」という言葉がありました。この群れで救われ、神学校の第一期生であった父は、フェローシップを愛し、神学校のレベルの向上を心より願っていました。この父の遺志を、今自分はどれほど引き継いでいるのかと自問するこの頃です。

冬期講座のCD/DVDのご注文について

本号に掲載しました三澤先生の冬期講座のCD/DVDをお求めいただけます。代金はCD、DVDのいずれも資料代込みで各1セット2000円です。

なお、本年度11月のオープンカレッジ（「キリスト教社会福祉論入門」鹿毛独歩先生）のCD/DVDも上記の代金になります。

昨年度以前の講義は、各1セット1000円です。お求めいただけるのは、以下の講義です。

- ・2004年度「選民宣教」ライクマン師（DVDのみ）
- ・2011年度「教会と音楽」エバンズ師（DVDのみ）
- ・2013年度「聖書の読み方」清水師（CDのみ）
- ・2013年度「宣教学特別講座」広瀬師
- ・2014年度「現代におけるバプテストの役割」三澤師
- ・2015年度「教会への警鐘～異端について」三谷師
- ・2015年度「四福音書の調和と特徴」白石師
- ・2015年度「牧師に求められるリーダーシップの資質」ミリオニ師
- ・2016年度「宣教学特別講義」奥村師（DVDのみ）
- ・2016年度「この時代に聖書は何を語るか」三澤師
- ・2016年度「宣教師の視点で見た日本宣教のあり方」バーゲット師
- ・2017年度「宣教学特別講義～宣教師論～」バーゲット師
- ・2017年度「福音と文化」斎藤（秀）師、加治佐師
- ・2017年度「イスラエルの礼拝と旧約聖書に見る『聖』」ライクマン師
- ・2018年度「この時代におけるキリスト教教育・児童伝道のあり方」上山師、杉山兄
- ・2018年度「JBBF 信仰箇条の歴史と理解～『序文』をめぐって」白根師
- ・2018年度「伝道説教と牧会説教～現代日本人の心に届く説教とは」ボード師

ご希望の方は、①お名前②教会名③講座名④CD、DVDの希望とセット数④送付先のご住所を明記の上、書面にて次ページの連絡先へご注文ください。

第62回卒業式 及び卒業カンファレンス

<卒業式>

2020年6月19日(木) 午後2時～4時

<特別記念授業>

2020年6月19日(木) 午前10時～
11時半

講師: 上田晃師(名古屋 BBC 国内宣教師)

講演テーマ: 「半世紀に渡る神学校の授業を振り返って」

<卒業カンファレンス>

2020年6月18日(木)

講師: 石川実師(調布 BBC 牧師)

講演テーマ: 「旧約聖書(律法)の中に見る福音～特にレビ記に見る福音と私たちの生活～」

私たち現代人は、全ての領域において多元的な見方をします。それは、同時に「全てを相対化」した評価しかできません。

首尾一貫した神の民として旧約の中に福音を見出すことができるのか。絶対者なる唯一の神を信じる歩みとは、どう生きることなのかを現代人に問います。

その他のおもな予定

- 後期伝道実習(船橋 BBC)
4月21-26日
- 教師・管理委員会合同研修会/第二回入
学考査 7月6-7日

授業再開について

現時点(3/14)で、休校措置をとってから2週間余りが過ぎました。余程のことがない限り、3/17から授業再開の予定です。とはいえ世界の感染状況は予断を許しません。手洗い、消毒、換気、マスク着用など、できる限りの予防対策を行っていきます。続けてお祈りに覚えていただければ幸いです。

～ 編集後記 ～

今年度一年間、常任教師会書記の三谷先生と共に、神学校だよりの編集を臨時で担当することになりました。主から与えられた働きとして取り組み、群れのために少しでもお役に立てればと思います。よろしくお願いいたします。

今号は前号よりもページ数が増えました。冬期講座とスクーリングの内容が中心となっています。三澤先生による講義内容の要旨は、資料としても貴重なものと思います。

本来なら、3月上旬のJBBF総会に合わせて発行する予定でしたが、中国・武漢発のコロナウィルス感染拡大による総会延期に伴い予定を見直し、諸々の都合を鑑みて3月下旬の発行となりました。

諸教会の皆様におかれましても、様々な対応でご苦労あるかと思います。主の守りと支えが豊かにありますように、お祈り申し上げます。
(加治佐清也)

発行: 日本バプテスト聖書神学校

〒389-0111 長野県北佐久郡軽井沢町
大字長倉 4696-27

TEL: 0267-46-4689

FAX: 0267-46-5203

Eメール: jbbf.jbbc@gmail.com

ホームページ: jbbc.jpn.org

郵便振替: 00180-1-700102